

# 『触れ合い』

触覚の肯定

松の木に触れる風のように  
他者に触れることを学ぶ  
自分の直観と知覚を信頼し

触れ合いは、神秘的なるもの  
必要なものの根源を分かち合う

私たちの呼吸は、空気に触れ  
足裏は、大地に触れる

瞬く星は、その輝きで触れ  
私たちは、気づかないうちに  
その輝きに抱かれる

触れ合いを恐れる者は孤立し  
彼らにとって、すべての人間は異質に見え  
存在自体すら、実在しないかのようだ

時代の流れは、  
あなたを無感動で冷淡な  
人間にさせる

合理性のコードは、  
人を自由にさせない

世界につながれ  
いたる所で人々は  
無意識に一様化していく

手を伸ばし触れ、  
あなたが見る世界を肯定しよう  
そして、人の心に触れることを  
決して恐れず  
行動で思いやりを示そう  
もし、誰かが砂漠のように見えるなら  
そっと、水を与えよう  
多くの触れ合いは  
たとえ困難な状態にあっても  
いつかは神に抱かれるという  
限りない希望をもたらす

シンディ: この絵をよく見て。これは「生」？それとも「死」？どちらを描いているの？

ドン: これは表裏一体です。密接なつながりがあります。

シンディ: なるほど……どうしてこのようなばかげたこと描くの？

愛子: そうね、でも作者は、本当にに分かっていれば、彼は詩を必要とするでしょうか？

ドン: まあいいじゃない、だってすべての詩は、ある意味では骸骨のよう。文字の墓場って  
いうのも、時には面白いしね。

- T Newfields (和訳: 吉田典子)

開始: 1993年 静岡・完成: 2018年 横浜

クリエイティブ・コモンズ・トリビューション・ライセンス {{CC-BY-2.1}}

